努力の先に見える景色

一宮中・２　佐藤　麗和

「水泳大っ嫌い！」
「水泳大好き。」
私は、年中から地元のスイミングスクールに通い始めました。始めた理由は、もともと自分は体が弱く、お医者さんに勧められたからです。その出来事で人生が大きく変わりました。
　時が経ち、どんどん上のクラスへ上がっていきました。その時の私は、習い事としてやらされていると思っていました。知り合いも下のクラスにはいるけれど、自分と同じクラスにはいなくて、正直憂鬱でした。泣いて嫌がったり、寝たふりをして時間が過ぎるのを待ったりと、当時小さかった私は夜疲れているのにプールに行くのが嫌でした。時には、
「水泳大っ嫌い！」
と言う日もあったそうです。それを聞いた今の私はびっくりしました。
　小二のころ、平日に通っていたのを、休日の昼間に変えました。当時の私は、平日だと他の習い事と被って行けないぐらい習い事を頑張っていました。英語塾、幼いころからやってきたサッカー、ピアノなどをしてきましたが、多くやっていると、全て中途半端になっていました。
　小学校高学年になると、中学に向けて習い事をしぼろうと思い、スポーツが大好きな私はサッカーと水泳だけにしました。二つでも当時は結構きつかったです。
　小学五年生、憧れであった選手コースのタイムを突破し、選手コースに入れました。きっかけは、大好きなコーチが選手コースを勧めてくれ、最初は乗る気ではなかったものの、次第に選手コースに入りたいと思ったのです。それから本気で水泳に熱が入りました。入りたてのころはこんなにきついのとびっくりしました。その覚悟はあったけど、想像を超えるきつさでした。私は一番最年少の小五。同じレーンで泳いでいた最年長は中三でした。速い人だらけで一時期は行きたくなくなり、一か月ほどお休みしました。だけど年中や年長のころと違ったのは、水泳は大好きでした。年上だけで練習が怖かったのが要因でした。でも周りはどんどん速くなっていると考えると負けず嫌いが発揮され、行かないと！という気持ちになれたのです。
　小六では年下も入ってきて試合にもたくさん出場しました。トビウオ杯という大きな大会にはタイムが届かず、悲しかったです。悔しくて上へ行けるように日ごろの練習をがんばりました。六年生の最後には三河地区の選ばれた人だけが行ける練習会がありました。レベルの高さにびっくりした反面、絶対についていこうという前向きな気持ちになれました。AグループとBグループに分かれました。私はBグループでした。練習は相変わらずきついです。でも私にとってとてもいい刺激で、水泳への思いがどんどん高まっていきました。いつもの比にならないぐらいのご飯の量には、度肝を抜かれました。合宿はきつい思いが大半だったけれど、新しい友達もできて、今でも大会があったら必ず会うくらいの仲になりました。水泳は本当にいいスポーツです。あいさつなどの礼儀も学ぶことができると私は思います。やっててよかったです。
　小学校卒業とともにずっとやっていたサッカーを辞めました。正直どっちを続けるか悩みましたが、水泳にしました。続けたい気持ちが水泳の方が大きかったからです。それから私は水泳に熱中しました。
　中学一年生、私は中学校に入学しました。慣れない教室でしたが、いい子ばかりですぐに仲良くなれました。中一から私の水泳は「も

っと本気になりました。
　中一の夏、私は学校から出る東三河総合体育大会に出場しました。一種目だけで、中一が二人以外はみんな年上で正直怖かったです。百メートル背泳ぎでは全然いいタイムが出なくて悔しかったので、来年絶対一位をとってやる！と思いました。
　中一の九月ごろ、私は選手コースの中でも上のクラスに行き、憧れている先生に出会いました。
　それからの練習は本当に過酷なものばかりで多いときは七キロ泳ぎました。
　大会に出るとベストがどかどか出て結果として分かりやすく出ました。あのうれしさは忘れることができないです。冬は来年の夏に向けてとことん練習を積み重ねました。飛び込みも、ものすごく嫌いだったのに、いつの間にか自信がついて上手くなりました。
　たくさんの試練を乗り越え、中学二年生。夏の東三大会が始まりました。去年と違い、二種目出場しました。一つ目は二百メートル背泳ぎ、二つ目は去年のリベンジで百メートル背泳ぎに出ました。二百メートル背泳ぎは私以外全員三年生でした。しかし、私はセンターコースだったので、勝つ自信しかなかったです。百メートル背泳ぎはオープン参加として県基準一秒未満を切っている選手のみ出場でき、私一人だけだったので、一人だけで泳ぎました。結果は二百メートル背泳ぎ一位、県突破。百メートル背泳ぎ県突破でした。表彰台の一位のところに乗ったときはものすごくうれしくて、
「水泳大好き」
と思えた瞬間でした。
　ついに県大会。やっぱり県の壁はすごかったです。納得いかなかったけれど、来年は絶対決勝に残って東海に行く！と火がつきました。
　何事も必死に頑張ることが大切だと気づきました。今回上に行けなかったのは、まだ努力が足りないのかなと思ってしまいます。貴重な経験をさせてもらったので、今度こそ関わってくださっている人に恩返しをしたいです。

３・９